

## はじめに

著者	伊田 久美子, 田間 泰子
引用	女性学連続講演会. 2006, 11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10001">http://hdl.handle.net/10466/10001</a>

## はじめに

今期の連続講演会では、「家族・身体・セクシュアリティ」と題して、家族の現状とその歴史性・多様性を考え、今後の家族のあり方をさぐりたいと考えました。

家族は、いつの時代にも議論的になってきました。現代もその例外ではなく、家族は、家事育児、ドメスティック・バイオレンスや児童虐待、介護から生殖技術や少子化まで、実にさまざまな問題と関連して論じられ続けています。それほどまでに、家族とは私たちにとって、そして社会にとっても重要な役割を果たしている関係性なのです。その理由は、家族という関係性が私たちにとって一番「身近」だからではないでしょうか。私たちの生と性が、家族と深く関わっています。

しかし、家族という関係性がこれまで私たちにもたらしたものは、いったいなんだったのでしょうか。「夫婦と数人の子ども」で構成される幸せな家族イメージは、「近代家族」という歴史的な産物であり、特に戦後日本において達成されたものです。日本社会がグローバルな状況のなかで変化し続けている現在、この歴史的モデルに固執することは時代錯誤と言わざるを得ません。今こそ、「近代家族」モデルのなかで私たちが継承すべきものと棄却すべきものを熟考する時だと考えます。

今期は、特に身体と家族との関わりに焦点を当てている家族研究に注目してみました。フェミニズムとジェンダー論は、単独で発展してきたわけではありません。家族については、特に歴史学、人類学、現代思想、医療の発展との関わりが大きいいため、今期の講演会では、そのような諸潮流のなかでフェミニズムとジェンダー論もまた発展してきたことを実感していただきたいと願いました。

女性学連続講演会・連続セミナーに積極的に参加され、熱心に討論してくださったみなさまに、心から御礼申し上げます。

大阪府立大学女性学研究センター

伊田 久美子

田間 泰子